

# Self-as-We 自己観に基づくデジタルソーシャルキャピタル基盤の倫理要件に関する検討

中平篤<sup>1</sup> 大橋盛徳<sup>1</sup> 出口康夫<sup>2</sup>

**概要:** 信頼や社会規範等の社会関係資本をデジタルな情報として扱う情報活用基盤としてのデジタルソーシャルキャピタル基盤の構築を目指す際には、信頼情報等が社会関係性情報としてユーザに受容される仕組みの構築が必要となる。このため、東アジアの「真なる自己」を踏まえた新たな哲学的自己観である「Self-as-We (われわれとしての自己)」をもとに必要な要件について検討した結果を報告する。Self-as-We 自己観のマルチエージェントシステムにおいて、情報システムも「われわれ」のエージェントとして位置づけられ、エージェント間でのフェロウシップを保つことが倫理的に要請される。このフェロウシップとして求められる要件を紐解き整理した。

**キーワード:** 情報活用, 哲学的自己観, Self-as-We, フェロウシップ, ソーシャルキャピタル

## Study on Ethical Requirements of Digital Social Capital Platform Based on Self-as-We Concept

Atsushi Nakadaira<sup>†1</sup> Shigenori Ohashi<sup>†1</sup> Yasuo Deguchi<sup>†2</sup>

**Abstract:** We are considering the establishment of a digital social capital platform as an information utilization infrastructure that treats social capital such as trust and social norms as digital information. However, this assumes a social consensus on how to manage social-capital information online. This paper reports the study on an examination of ethical requirements based on "Self-as-We," a new philosophical idea of self that is based on East Asian "true self". In Self-as-We as a multi-agent system, information systems are also considered as agents in "we", and are ethically required to maintain fellowship among agents. The requirements for this fellowship were clarified.

**Keywords:** information utilization, philosophical self-consciousness, Self-as-We, fellowship, social capital

### 1. はじめに

近年の ICT 技術の発展や社会状況の変化により、シビックテックやクラウドファンディングなど、個人の活動が社会に影響を与える可能性が広がっている。このようなオンラインの活動は、立場や年齢、地理的な壁を越えた人とのつながりを生み出すことで、これまでできなかったような協調行動や新たなアイデアの協創を促し、社会課題の解決につながるかと期待されている。一方、このような新たな協調活動においては、リアルには出会うことがない人々との間においても信頼関係を構築することが重要となるため、不確かな情報も含め、多くの情報の中から必要な情報を選別し、信頼に足るパートナーを見つけ出すことがより一層求められると考えられる。

個人の信用力として、契約の履行性や債務返済の確実性等を数値化して金融サービスに利用することは以前から行われている[1]。また近年では行動や交友関係などが数値化され、数値が高ければサービスにおいて優遇され、低い場合にはサービス享受の条件が悪くなる例もある。このような仕組みによって、社会的な問題行動が抑制される一方、

ある特定の価値基準の下で個人の様々な活動が規制・監視され、行動を誘導される危険性も指摘されている[2]。

本研究は、このような社会環境の中、いわゆる監視懸念を払拭し、個人がより活躍できる情報環境を目指し、デジタルソーシャルキャピタル基盤という情報活用基盤の構築を目指している。具体的には、自身の活動データを自ら積極的に活用し、コミュニティとの関係性やそれを支える規範、それらから醸成される信頼性とといったソーシャルキャピタルのファクターを、人やコミュニティが持つ多様な価値基準を視野に入れて活用できる仕組みの構築を目指している。

このようなソーシャルキャピタル情報は個人の関係性情報であり、それが社会的に受容されるためには、その扱いの倫理的な要請を考慮した情報活用が求められる。本報告では、東アジアの伝統的自己観に根ざした Self-as-We (「われわれとしての自己」) という哲学的自己観 [3] から導かれる倫理的な要請について検討した内容について述べ

<sup>1</sup> 日本電信電話(株) 社会情報研究所  
NTT Social Informatics Laboratories  
<sup>2</sup> 京都大学大学院 文学研究科  
Kyoto University, Graduate School of Letters

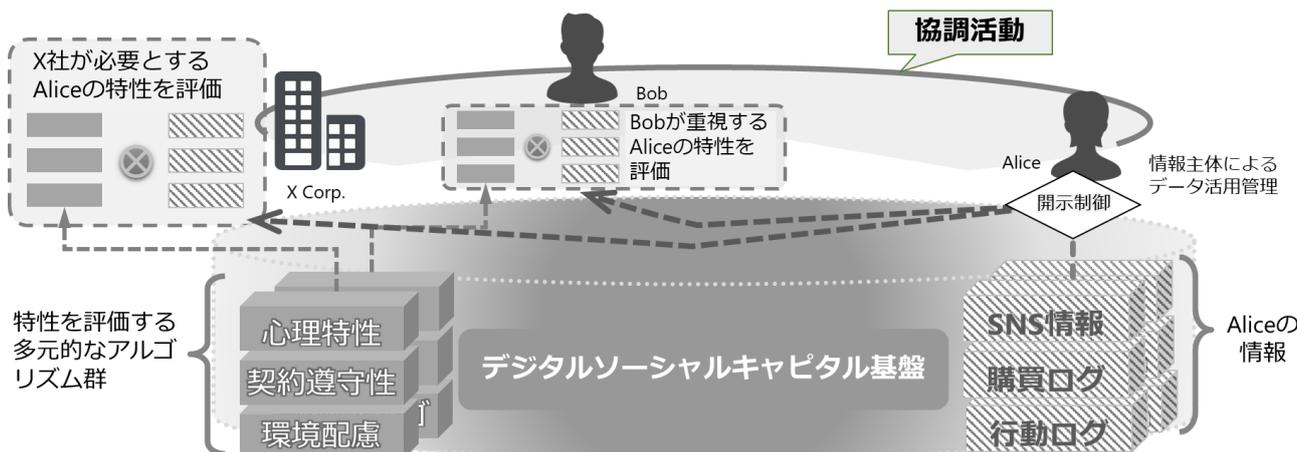


図 1. デジタルソーシャル基盤での情報活用例。

る。まず、Self-as-We 自己観に基づいた要請を検討するフレームワークを組み立て、そのもとで情報基盤として検討すべき項目を整理した。

## 2. デジタルソーシャルキャピタル基盤

「ソーシャルキャピタル (社会関係資本)」は、様々な仕方で定義されている社会学的概念だが、中でも「信頼、互酬性の規範、ネットワーク」という定義が、最も知られている[4]。このような意味でのソーシャルキャピタルによって、協調活動が効率的に進められている例は多い。実際、ソーシャルキャピタルは、人付き合いによって形成され協調活動の前提となっているとも言える。近年、オンラインでの活動が盛んになっていると言われているが、現実的には、オンライン・オフラインという切り分けが困難なほどに、オンラインの活動は人のつながりに大きくかかわっている。本研究は、このソーシャルキャピタルをデジタル化してネット上での情報の信頼性向上やグローバルな取引促進に活用する基盤としてデジタルソーシャルキャピタル基盤 (図 1) の構築を目指している。具体的には、デジタルソーシャルキャピタルを「様々なデータから導出される、ある個人や組織が有する、信頼や規律性等の関係性に基づく評価指標とその関係性自体」と定義した上で、それらを各種協調活動で適切に活用するための情報活用基盤としていくことを志向しているのである。

ここでの情報は、評価情報という側面を持つため、偏見や差別につながる情報化や情報管理を行うことが必須である。また、評価情報の元となるべき信頼や規律性は多元的な指標であることが重要であるとともに、情報主体がそれらの情報を適切に管理できることも求められる。

デジタルソーシャルキャピタル基盤を用いた信頼構築のイメージは次の通りである。協調活動をとにする相手を見つけるために、自らの管理の下、自身の活動データをお互いに開示する。そして開示された情報を、自身が管理するアルゴリズムにより評価する。画一的な基準による評

価ではなく、状況や目的、相性などに応じた評価を相互に行うことにより、個の特性を棄損しない最適なマッチングを可能にする。このような柔軟な基準による相互評価を核とした情報基盤で、自身の情報を自ら管理することにより、監視社会につながらない情報活用の可能性が見出されるはずである。

## 3. Self-as-We 自己観から求められる倫理要件

### (1) Self-as-We 自己観について

Self-as-We「われわれとしての自己」とは、個人としての「わたし」の根源的なできなさを考え方のコアとして、自己を、ある行為を支えている「マルチエージェントシステム」としてとらえる考え方である。自己を行為の「委ねのシステム」と見なすことで、自己が複数化する「われわれ化」されることになる。このマルチエージェントシステムは、複数の人間・装置・道具・社会インフラ・歴史的経緯・生物・無生物・自然環境といった極めて多種多様なエージェントを構成要素とする。このシステムは極めて多数のエージェントを含み、時空的にも広範囲に広がるシステムであるが、つねに何らかの境界は持っている。だがこの境界は、原理的に確定不可能であるという意味で「開いて」いるのである。

この自己観のベースにあるのは、身体行為において、「『私』は様々なエージェントに、自らの行為者性を委譲せざるを得ない」という洞察であり、『私』だけでは行為ができないという根源的なできなさをコアとする。あらゆる行為は様々なエージェントからなるシステムによってのみ可能になる。すなわち、「私」が持つ行為者性とは、「他のエージェントに自らの行為者性を委ねること」に他ならない。「私」の身体行為の行為者性は、常に、これら多数のエージェントに分配、分散されている。このことは、自らの身体行為の行為者性を自足的に占有できている行為者が存在

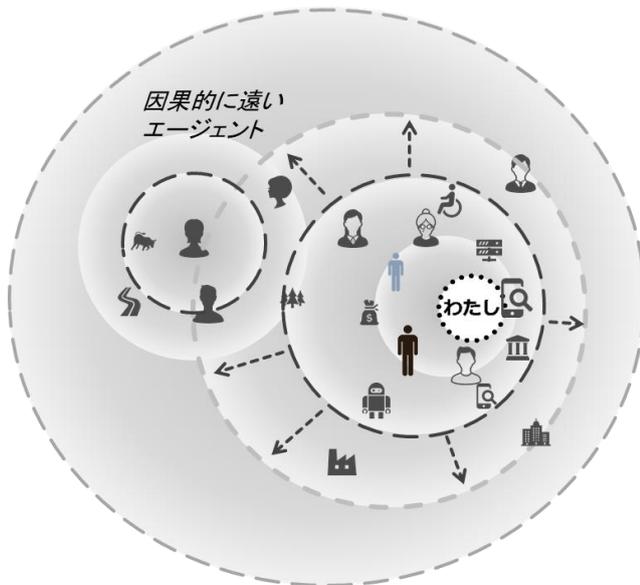


図 3. 「われわれ」の広がり。「わたし」に因果的に近いエージェントと因果的に遠いエージェントのイメージ。

しないことを意味する。複数のエージェントの参加がなければ、どのような身体行為も成り立たない。この意味で、すべての身体行為は、始めから共同行為なのである。

個人的自己である「私」は、その都度、「我々」と呼べる様々なグループに属したり、属さなかったりする。「私」にとって「我々」は、着脱可能な衣装のような存在なのである。このことは、すべての「我々」を脱ぎ捨てた「裸の私」もまた原理的に存在し得ることを意味する。一方、先に見たように、自己としての「われわれ」とその一エージェントとしての「わたし」の間には、「わたし」が存在し続ける限り「われわれ」から逃れられず、また「わたし」なしに「われわれ」は存在し得ないという関係が成り立っている。このように「われわれ」と「わたし」は相互に不可逃的な存在なのである。

「われわれ」を構成するエージェントは、共に「われわれ」から行為者性を委ねられた共同被委譲者である。エージェントは共同被委譲者同士として協調行動を行っている。「われわれ」から委ねられる役割はエージェントごとに異なりうる。あるエージェントは重い役割を担い、別のエージェントは軽い役割しかあてがわれないということもありうる。また現実の組織においては、あるエージェントが命令（指示・指導）者として別のエージェントを命令（指示・指導）するという階層構造（ヒエラルキー）が成り立っている場合もある。だが「われわれとしての自己」という観点からは、重責を担うエージェントやヒエラルキー上位者であっても、また軽い役割しか果たさない者やヒエラルキー下位者であっても、共同被委譲者であるという点では同じである。結果として、「われわれ」を構成するエージェン

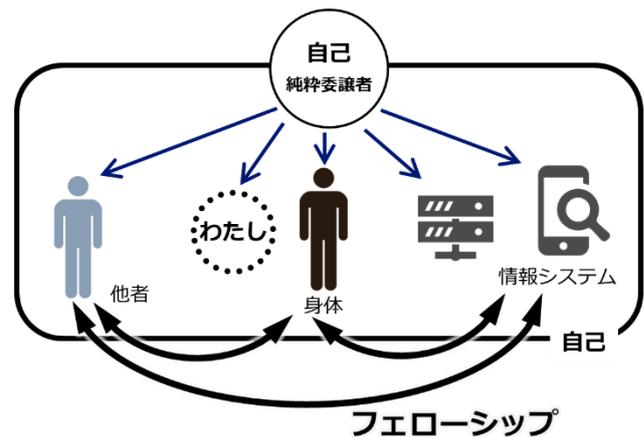


図 2. エージェントとしての情報システムは、他のエージェントとのフェローシップ関係が求められる

トの間には、協調性と平等性を基調とするフェローシップ（仲間）関係が成り立つことになる。「われわれとしての自己」の一員であることを互いに意識することで、人々の間には、原理的にフラットな関係を前提とする仲間意識が（そうでない場合に比べて）より前景化されることが予想される。

## (2) Self-as-W から倫理的要請を導くフレームワーク

この Self-as-We に対しては、よい「われわれ」であるべきだとする倫理的要請が課される。ここで言うよい「われわれ」とは、

- ① より開かれ、より大きなネットワークであり、また
- ② エージェント間においてフェローシップが保たれている

ような「われわれ」を意味する。

「われわれ」には、道具や動物、さらには AI やロボットといった多様なメンバーが入りうるが、これらのメンバーの中でも、何らかの倫理観を有し倫理的に振る舞うことのできる倫理的エージェントに対してのみ、全体としての「われわれ」をよりよいものとする倫理的責任が発生する。

「われわれ」はつねに境界や外部を持つが、それをより大きな「われわれ」へと開いていくことで、因果的により遠いエージェントも順次内部に含まれてくることになる

(図 3)。ただし現実的には、因果的に近いエージェント（通常の意味での共同行為の仲間）の間で一定の目的が明確に共有されている場合が多い。このような場合、目的を共有しているエージェントには、「われわれ」全体をよりよいものとする倫理的な共同責任を負っていることを相互に意識し合うことが求められる。具体的には、狭い通常の意味での共同作業に当たるグループや企業のメンバーは、例えば自分たちの間にフェローシップを確保する共同責任

を負っていることを互いに意識すべきなのである。

デジタルソーシャルキャピタル基盤のような情報システムを Self-as-We を構成する一エージェントとして位置づけることで、それに対して以上のような Self-as-We の倫理を適用することができる。その一環として、情報システムの設計者や運用者には、情報システムと他のエージェントとの間にフェローシップを保つという倫理的要請が課されることになる(図 2)。言い換えると、そのようなフェローシップが保たれるよう情報システムを設計し、情報の利用やシステムの社会実装のあり方を調整することが要請されるのである。この際、考慮に入れられるべきエージェントとしては、利用者や関係事業者、影響を受けるコミュニティなどが想定される。以下ではフェローシップをより具体的に規定し、それに即して情報システムに求められる倫理的要件を検討する。

## 4. Self-as-We におけるフェローシップ

### (1) フェローシップの 5 要素

ここでのフェローシップには以下の 5 つの側面が考えられる(表 1)。

- Common Destinyness (運命共同性/責任共有性)
- Cooperativeness (行為の共同性)
- Companionship (連帯性)
- Acquaintanceship (直知性)
- Equality, Flatness, Non-hierarchy (平等性)

Common destinyness はフェローシップの責任に関わる次元, Cooperativeness は行為的次元, Companionship は感情的次元, Acquaintanceship は認知的次元, Equality はエージェント間の関係性に関わる次元を表す概念である。

これらの次元の中で最も基礎的と言えるのが Common Destinyness である。そもそも「フェロー (fellow)」とは、複数のエージェントがともに失敗の可能性やリスクを負いつつ一定の企画に参加する状況を想定した言葉であり、最初から運命共同体的な意味合いを担った概念である。Self-as-We の行為は「われわれ」から個々のエージェントに委譲された行為であり、それぞれのエージェントは常にある行為が失敗に終わるリスクとそれに伴う責任を共同で負っている。この意味で、互いに Common destiny (共同の運命) を担う、即ちジョイント risk taking を行うことが Self-as-We から導かれるフェローシップ概念の根幹であり、Cooperativeness, Companionship, Acquaintanceship, Equality といった他の次元も、ここから導かれることになる。言うまでもなく、何かが行かなくなった場合、一人にのみ責任を負わすことは、この Common Destinyness に反することになる。

フェローシップの行為的次元を表す概念である Cooperativeness は行為の共同性を意味する。ただしこの共同性には、様々な程度や様態 (mode) の違いがある。一定

表 1 フェローシップの 5 観点

項目	説明
Common Destinyness 運命共同性/責任共有性	(責任) Joint risk-taking, 特定の人だけに責任を押し付けない。利得, 損害に共同責任を持つ。ステークホルダーを広げていく。
Cooperativeness 共同行為性	(行為) 意図, 目的の共有, 行為の共同性 対立概念として単独行為
Companionship 連帯性	(感情) 連帯感, 対他感情。エージェント間で持つ情動。持続的
Acquaintanceship 直知性	(認知) 経験知としての理解 対立概念として Knowledge by description
Equality, Flatness, Non-hierarchy 平等性	(関係) 関係の構造として平等性, 非階級性, 指令関係を作らない 理想形として全員が同等の権利権限を持つ

の意図や目的を明確に共有し、かつそのことを互いが意識している場合、狭く強い意味での共同性が成り立つ。会社などの一定の組織で働くメンバーに話を限れば、このような強い共同性が成り立つ場合もありうる。一方、We の範囲を広げ、社会一般、人類一般、さらにはヒト以外の動物、様々な環境要因をも含めて考えると、それらのエージェントの間の共同性も、より広く弱い概念となる。より弱い共同性の中には、例えば、積極的に協力はしないが邪魔もしないといった中立的なモードも含まれることになる。

フェローシップの感情的次元に相当する Companionship は、仲間意識や連帯感、さらには仲間と共に行う喜びといった感情や情動を意味する概念である。これは、例えば私が他の仲間に対して持つ感情と言う側面を持つ一方、その仲間が自分に対して持ってくれているだろうと私が期待している感情でもあり、さらには個々人の感情には還元されない場の雰囲気として感じられるケースもありうる。また Companionship には仲間に対する慣れ親しみの感情という側面もあり、例えば何らかのプロジェクトが終了してチームが解散し、行為の共同性としての Companionship が存在しなくなった後にも継続しうる持続性をも兼ね備えている。

Acquaintanceship はフェローシップの認知的次元を表す概念で直知性ないし「見知り」を意味する。「見知る」とは、典型的には、手を伸ばせば届く範囲で対象や相手のことを知っている、またはある人物を実際に対面で会って知っていることを意味している。このように Acquaintanceship は、自然物のなどの対象の認識にも、対人認知にも適用される

概念である。さらにまた、それは、何らかの社会制度や仕組みを規約や文献を通して理解するのではなく、実際にそれを体験することで知る場合にも用いられる概念である。

何れにしても、それは、ある事柄を、それについての定義や記述で知るのではなくて、現物を目の前にすることによって知るといった認知の仕方を意味するのである。哲学においては前者のような知識は *knowledge by description* と呼ばれ、見知りによる知、即ち *knowledge by acquaintance* と区別されている[5]。

最後の *equality, flatness, non-hierarchy* はフェローシップの関係性の次元を表す概念で、基本的に平等性を意味する。運命共同体の仲間としてのフェローの間には、共にリスクと責任を負う者同士として、原理的に平等でフラットな関係が成り立つことが求められる。もちろん現実の人間関係や組織構造の中では、しばしば指示命令系統などの上下構造や階層性が成り立っている。*Self-as-We* におけるフェローシップ概念は、このような階層性を一概に否定するものではない。フェローの間で一定の役割分担が発生することは当然であり、また組織がその機能を十全に発揮するためには、階層的な組織構造をとらざるを得ないケースも多々あるからである。ただし、このような階層性や上下構造は、あくまで必要最低限のものに留められるべきであり、なるべく平等性に配慮した組織づくりを行うことが、フェローシップからの要請なのである。もちろん組織機能上の役割分担を超えた、階層上位者による下位者に対する尊大で抑圧的で態度、さらには差別、排除といった扱いは、フェローシップに照らしても全く正当化されない。

## (2) 情報システムとのフェローシップ

次に、上記のフェローシップの各次元に即して情報システムが満たすべき倫理的要件を考察する。フェローシップは、例えば情報システムとその利用者の間、複数の利用者の間というように、様々なエージェントの間に成り立つべき関係である。そこで以下では、これら様々な関係の違いをも視野に入れつつ検討を進める。

### Common Destiny

*Common Destiny* 次元について、デジタルソーシャルキャピタル基盤という情報システムの利用者を軸に考えてみよう。利用者が属する運命共同体としては、まずは利用者同士からなる集団が想定される。だが情報システムによって形成される運命共同体は、そのみにとどまらない。例えば、利用者と情報システムの運営者、運営事業者も一種の運命共同体を構成していると言える。

この場合、利用者は自らや他の利用者の目的・意図のみならず、これらのプラットフォームの目的・意図も理解した上、場合によっては、結果としてよい運命共同体、言い換えるとよい「われわれ」をもたらすように、それらに介入し調整する義務が発生することになる。逆に言えば、プラットフォームには、利用者から自らの目的・意図を開

示し、それらを利用者からのフィードバックを通じて、必要に応じて、それらを調整・改訂することが求められるのである。

一方、プラットフォームもまた利用者の目的・意図を把握し、それが例えば、偽の情報によって他の利用者を騙すといったフェローシップを毀損するものでないことを担保しておく必要がある。

このような利用者とプラットフォームの間の目的・意図の相互調整に際しては、それ以外のエージェントの視点、即ち「われわれ」を構成するより広いメンバーの視点-例えば情報システムの運用が環境問題に対してもたらす正負の効果-をも考慮する必要があることは言うまでもない。

### Companionship

情報システムにおいて問題となるフェローシップの感情的次元とは、利用者がそのシステムを利用することによって、他のエージェントに対して持つことになる *companionship* 感情である。情報システムを利用することで、利用者は、人間としての他の利用者のみならず、ペットなどの動物やさらには AI やロボットや情報システムそのものといった機械にまで仲間意識や親密感を抱くことも十分ありうる。「われわれ」の中に、人間以外の多様なエージェントをも含めるという意味で脱人間中心主義の立場に立つ *Self-as-We* の観点を取れば、後者のような、いわば異種間の *companionship* は原則的に許容される。一方、何らかの仕方人間中心主義 (*anthropocentrism*) を維持する文化や価値観によれば、異種間 *companionship* は、場合によっては、人間以外のエージェントに対して不当に過大な価値を置くことで、人間の尊厳を毀損する結果をもたらすとして倫理的に問題視される場合もある。

### Acquaintanceship

情報システムがその利用者との間にフェローシップ関係を築き、結果としてともに「われわれ」を構成できるかどうかの一つの鍵は、両者の間にフェローシップの認知的な次元である *Acquaintanceship* が成り立つかどうかにある。利用者が情報システムに対して *Acquaintanceship* を持つためには、本格的な使用ではなくトライアルを積み重ねることで、利用者が情報システムを実際に使いこなし、その利用の仕方のコツ - 例えば、どの程度の個人情報を提供すれば、どのような対価が得られるのかについての実感 - を体得し、そのシステムを使いこなすことができるようになる機会を持つことが重要となる。

また情報システムの側も、このような利用者のトライアルを通じて、利用者の振る舞いを学習し、それを踏まえたシステム運営のマニュアルを自律的に獲得していく必要がある。

### Equality, Flatness, Non-hierarchy

フェローシップの確保という観点に立てば、情報システムは利用者同士の関係、利用者との関係等、様々

な関係において Equality を尊重し追及したものでなければならぬ。例えば、情報に対するアクセス権やシステムの管理権に即して言えば、全ての利用者や運営者が同じ権限を有する状態が理想的とされる。一方、アクセス権や管理権に関して完全に平等なシステムは、セキュリティや機敏性に関する問題を抱えることになる。そのため実際の運用に際しては、これらの問題を回避しつつ、できるだけ平等性を確保するという柔軟で現実的な姿勢が望まれる。

サービス利用の認証権に関しても同様のことが言える。現状では運営事業者が認証権を独占的に管理しているケースがほとんどで、SNS の一方的なアカウント凍結が問題視される事案も起きている。ここでも認証権を広く利用者に解放し、相互的で民主的なプロセスを踏まえ認証判断を行う仕組みの導入が志向されて然るべきである。

システムの平等性を高めるためには、権限分散系システムとしてのブロックチェーンの導入が一つの方策として考えられる。ただブロックチェーンにも様々な問題が指摘できる。例えば、コード開発者やマイナー事業者などが過剰な権限を有してしまう危険性や、システムの性質上、特定のアプリケーションが欠かせない状況が生じた場合、そのアプリケーションの実質的なオーナーに権限が集中するケースも想定されるのである。ブロックチェーンを導入するに際しては、これらのケースを排除し平等性を保つ工夫が求められる。

何れにせよ、Self-as-We から導かれるフェロウシップ要件という倫理的な要請をいかに満たすべきかを、情報システムを構成するエージェントの間の多様な関係に即して考察することで、そのシステムの社会実装に向けた議論を具体化することができるのである。

## 5. デジタルソーシャルキャピタル基盤におけるフェロウシップ

デジタルソーシャルキャピタル基盤は、ソーシャルキャピタルの一環として、社会関係における個人の振る舞いに関する情報を扱うシステムである。従って、その社会実装

に際しては、「わたし」という個人に関わる側面と同時に、「われわれ」という集団的・社会的側面をも前景化した倫理的配慮が求められる。また単に、協調行動を行うために相手をパートナーないしその候補評価として相互に評価しあう利用者のみならず、利用者や運用主体を含む情報システムのプラットフォームとの関係や、情報システムの外部にいるエージェントとの関係をも考慮しなければならない。

このような見地に立ち、本研究では、行為の委ねのシステムである Self-as-We という新たな自己観に着目し、その倫理的な要請の一つである「われわれ」を構成するエージェント間のフェロウシップ関係の実現・確保という観点から、デジタルソーシャルキャピタル基盤が満たすべき倫理的な要件を列挙してきた。これらの倫理的な要件は、デジタルソーシャルキャピタル基盤の社会実装に当たって重要なファクターとなりうるものであり、それを具体的に検討することで、その基盤をよりよいものへと精錬しつつ、社会実装を推進することが重要となる。

## 6. おわりに

協調活動を促進する情報活用基盤としてデジタルソーシャルキャピタル基盤を検討するにあたりその倫理的な要請の検討を新たな哲学思想をもとに検討のフレームワークを構築し、検討観点を整理した。東アジアの伝統的自己観に根ざした Self-as-We 自己観をもとに、情報活用システムと利用者等のフェロウシップ関係について検討課題をまとめた。

## 参考文献

- [1] 大屋雄裕, 個人信用スコアの社会的意義, 情報通信政策研究, 第2巻, 第2号, p. 1-15.
- [2] 梶谷懐, 高口康太, 幸福な監視国家・中国, NHK 出版, 2019.
- [3] 渡邊淳司, 村田藍子, 高山千尋, 中谷桃子, 出口康夫. 「われわれとしての自己」を評価する-Self-as-We 尺度の開発-. 京都大学文学部哲学研究室紀要 (2020), 20: 1-14.
- [4] 三隅一人. 社会関係資本. ミネルヴァ書房. 2013, 80p.
- [5] バートランド・ラッセル. 神秘主義と論理. みすず書房, 1959, 241p.